

友人に与えて懐郷を論ずる書

廢然兄：

蕭君の文章のは当然、ただ理想化された江南でしかありません。凡そ懐郷・懐国および懐古は、懐う対象がすべて空想の中の情景でないものはありません。もし事実を言うなら一様に何の愛すべきものもありません。なにかの本（『恋愛と心理分析』だったか）で次のような一節を読んだことがあります。某甲の妻はとてもじゃじゃ馬だったが、彼女の死後某甲は懐しがってほとんど病気になるようで、人に向っては彼女の賢さを称めました。彼は生前の妻のじゃじゃ馬ぶりを忘れてしまい、ただごくごくわずかな長所だけを覚えていて、それがしだいに大きくなって心の全部を占めてしまったからです。われわれは面前にない事柄について恋慕に耐えない時、往々にしてこのようになってしまっても、深く怪しまないようですが、これはむろん事実と信ずることはできません。

わたし個人はひょっとしてみんなとは少しばかりちがうかもしれません。事実には照して言いますと、浙東はわたしの第一の故郷で、浙西が第二の故郷、南京が第三、東京が第四、北京が第五です。だがわたしは必ずしも浙江が好きではありません。中国ではやはり北京が最も愉快で、住んでいられます。あの春夏の風塵がやや厭うべきはか。以上の五カ所の中でわたしがいつも懐しく思うのは日本の東京及び九州関西一帯の地方です。外国に居ると現実社会とは較や疎隔され、美しい印象が保存されやすいからでしょう、あるいはまだ別の理由があるかもしれません。いま中国の如きは自然の美しさが人事の醜悪に打破され、幻想でさえもなかなか成立たず、それで史跡でとても盛名を負った於越〔越の国、紹興一帯を言う〕もわたしの心の中ではただ毛宗の筍・楊梅それに老酒を連想し、まずまず楽しめるかと思うだけで、その他はただ人民の鄙陋薄情、天候の湿っぽさと酷暑などなど、不快な追憶を引起すだけです。わたしは海辺の水郷で生長しました。いまでは水に対しては完全によしみが無いとは言えませんが、別に恋しいというほどではありません、什刹海の池に向っては呆然とするばかりですが。紹興の応天塔、南京の北極閣はいずれもわたしが極めてよく識っているなじみの地ですが、回想してみても何の感動もありません。反って東京浅草の十二階の方がより一層親密感があります——前年の大地震で倒壊したのは、とても残念で、まるで親友の家が火事になったニュースを聴いたかのようです。雷峰塔の倒壊はただ古物が一つ失くなったと感じただけです。わたしのこういう感想はあるいはあまり合理的でないかもしれませんが、人にはそれぞれ独自の経験があり、感情は往々にしてその影響を受けて変化するのは、実際しかたがない事です。

事実の面では、あなたの仰る努力して人力によって自然と人生の美を発展させ、それを愛すべき世界にするというのは、正しいまた肝腎の事です。われわれは理性から国を愛すべきだと言いますが、ただ本国を好くしないとわれわれ個人も自由に生存できないから、これは利害の上でもそうならざるを得ないのです。決して本当に感情から来て利害関係を離れた愛ではありません。もしわれわれが真心からこの国あるいは郷土を愛するようにしようとするなら、まずそれを愛すべき物にしあげなければなりません。ここで述べた問題はあるいはかなり弁論の余地がある

かもしれません。(現今のように愛国教の盛行する時には、)わたしもこの演武台の攻略の準備はしていませんので、ただお手紙に述べられたことを見て、しばらく自分の意見を述べ、賛同の意を表したまでです。

一九二五年五月七日。

※初出：1925年5月18日『語絲』第27期